

無心の壁再考

—アフリカ人の個人的援助要請の意味を探る—



2004年5月末に本学で日本アフリカ学会が開かれ、私は一つのフォーラムを担当した。その記録は国際人間学研究所から発行されている（2005年5月）ものの配布先は極めて限定されている。この研究ノートではまず記録の重要部分を抜粋し、その後改めて問題点を検討することにする。

I 日本アフリカ学会・中部大学国際人間学研究所 共催公開フォーラム

「無心の壁—アフリカ人の個人的援助要請とのしのぎあい：その意味を探ろう」からの抜粋（修正・削除アリ）

場 所：中部大学 1521 講義室
報 告 者：作道信介（国立大学法人引前大学教授）
中村香子（京都大学大学院博士課程在学中）
鈴木裕之（国土館大学法学部教授）
澤田昌人（京都精華大学人文学部教授）
慶田勝彦（熊本大学文学部地域科学科助教授）

コメンテーター：岡崎 彰（神奈川大学経営学部教授）

司 会：長島信弘（中部大学国際人間学研究所長、国際関係学部教授）

1. 長島信弘：趣旨と問題提起

趣旨（配布資料）

アフリカで研究のために生活していると、精神的、経済的、時間的にかなりの地位を占めるのがアフリカ人からのさまざまな「個人的援助要請」です。それは個人的な体験であると同時に、内容の多様性を考慮しなければ、共通体験でありましょう。従来個人的な物語として潜伏しがちだったこうした体験とその意味づけを学会で語ることによって社会化し、多角的に論じてみようというのがこのフォーラムの趣旨です。

この問題の基軸には道徳的価値観があると思われます。それに世界システム・南北

問題、拡大していく貧富の差（これにはアフリカ人の間の格差も含む）、NGO・NPO活動の妥当性、錯綜する国益追及と私利私欲等の複合要素がからみあってくるのです。

道徳的判断自体多様ですから、単一の合意を形成することは本日の目的ではなく、さまざまな違った見解が表明され、それらが共有されることを期待するものです。

問題提起（当日の発言から）

アフリカで生活していますと、滞在目的や地域、我々の身分によって違いはあると思いますが、多かれ少なかれいろいろな形で個人的な援助を要請された経験をお持ちの方が大多数ではないかと推察しております。個人的援助の要請が同一集団内で行わ

*中部大学国際関係学部国際文化学科

れる場合、ひいては外部の者になされる場合でも、人類学者はベギングということばを使うことが多いのですが、個人的にはこのことばは適切でないと考えています。感覚的にもいやなんですね。ベグという英語単語の持つイメージは、私が個人的に出会ってきた援助要請と語感的に全く違うからです。つまり、東アフリカのイテソや他の牧畜民の援助要求はベギングというようなケチなものではないというのが実感です。〔後記：援助要請者はその行為によってその場で社会的劣者になる事はないし、社会的劣者が援助を要請した場合でも、それは当然の権利の行使というニュアンスを持つということでしょうか〕

日本語の「ねだり」もちょっとつらいところがあるので「個人的援助要請」といういささか硬い表現を採用せざるを得ませんでした。〔後記：フォーラムの見出しに用いた「無心」ということばは「心にためらいがない」という意味で「ねだり」よりましかと考えたのですが、「無心」という行為は日本社会では社会的正当性を付与されていないことを付け加えておきます〕

個人的援助要請は現実には様々な価値観、要素が含まれているものだとご理解いただきたいと思います。この問題について経験豊富な方々がコメンテーターの岡崎さんや京大の太田さんなど今日何人も参加されています。思い起こすと、伊谷純一郎さんがトゥルカナからお帰りになった後京都大学の研究室でトゥルカナ流の「ナキナイ」（援助要求）を頻発して学生から煙草を巻き上げ、挙げ句の果てに黙って持って行く

ようになったという噂を聞いたことがあります。

今日は報告者の調査地体験を中心に話を進めていきます。比較という観点からアフリカだけではなくて東南アジアとか南米でこれらの問題どうなっているかと知りたい気持ちもあります。アラブ世界についても私は無知です。アフリカ的な属性というのはあるのか、東アフリカ牧畜社会の慣行を「アフリカの」として一般化しすぎているのか、疑問はつきません。たとえばアジアですと「おずおず」というのが個人的援助要請の態度という話を聞きました。ペルーの先住民は、（欲しいものを口に出せずに）最後にわっと泣き出すとことがあるということも聞いたことがあります。

このテーマを取り上げたいきさつについて簡単にふれておきます。中部大学でのアフリカ学会開催が決まったときに、私に分科会を一つ任せたいと同僚の宮本学会長に言われました。引き受けるなら、どこでも誰でもやりそうにない「危険なテーマ」をやってみようと考えました。即座に「個人的援助要請」というアイデアが浮かびました。〔後記：私自身「百戦錬磨の陽気なマキアゲリストたちを相手の親族戦争で私が得た勝利は、常に局部的一時的なものにすぎず、最後はいつも惨敗に終わった」（『テソ民族誌』1972,p123）、と書きましたし、『中央公論』に「アフリカ人の無心状」1971というエッセイを書いたこともあります〕

2003年に弘前大学での研究会に出席したとき、このアイデアをちらと漏らしました。その夜の飲み会で作道さんからいただ

いたのが今日お配りした論文です（「“つらさ”を手がかりにしたフィールド理解の試みー北西ケニア・トゥルカナにおけるフィールドワークから」、『人文社会論叢』、弘前大学人文学部第5号、2001年）。一読して感動しました。

「個人的援助要請の民族誌」としてこれほど厚い記述・分析があったのかと驚嘆するとともに我が意を得ました。次に、私は尊敬する岡崎彰さんにこの企画について相談し、やる価値があるという返事を貰って岡崎さんをこのフォーラムに拉致誘拐しました。

このテーマがなぜ「危険」か、というと、基本的に道德問題だからです。同義反復になりますが、道德問題を扱うことには危険がつきまといます。ポストモダンアメリカ文化人類学における魔女狩りからの危険にはいくらかでも対応できます。しかし、もっと微妙な「自主規制」、つまり「その事にはふれないようにしよう」という暗黙の自主的判断に逆らう危険があります。「世話になった人々の悪口は言いたくない、彼らの恥をさらけ出すのは良くない」という「道德的判断」もあるでしょう。あるいは、「目の前にいる貧しい人々の要求に応えるのは当然である」という考え方もあります。また「我々は彼らに比べてはるかにリッチなのだから、多少の出費は当然のことだ」という意見も耳にします。

どれも道德的妥当性のある判断・意見です。さらに、彼らの「個人的援助要請」を取り上げること自体「研究者の傲慢さだ」という声も聞こえてきます。こうした考え

方が「日本的」すぎるというわけではありません。作道さんと私の共有感覚は、彼らが「恥」と思っていないことを「彼らの恥」と解釈し遠慮することに対する疑問なのです。私たちは自分たちを「被害者」に仕立ててトゥルカナやイテソの人たちの「悪口」を言ってるのではなくて、彼らとの「対等かつ勝ち目のない」個人的交渉の実態を描こうとしているのです。

これと関連する知的問題があります。人類学者は「他人」の経験の解明に努めてきました。そうした過程における自分自身の経験について語るのは、多くの場合エッセイとか体験記という、「非学問的分野」での事です。アフリカにおける日本人研究者たちが研究過程での自己経験を「学問分野」で表現することには新たな挑戦の意味があるでしょう。これがこの分科会を企画した本意です。

2. 各報告者の「予告編」（配付資料）とアフリカ経験のプロファイル

2-1 作道信介：社会心理学。1993年から東アフリカ・トゥルカナの病気対処や占いなどの調査に従事。意識構造の近代化をテーマに研究をおこなう。その場で起こっていることを「自分をぬきにしないで」とらえたいと思う。現在は、トゥルカナの「占い場面、病気にかかったとき、起こること」を中心に調査をおこなう。

“ねだられえ”としてのエスノグラファー
私は、北西ケニア・トゥルカナでフィールド

ドワークをおこなっている。トゥルカナは半砂漠地帯でウシ、ラクダ、ヤギ、ヒツジ、ロバを放牧する牧畜民である。社会生活の特色は交渉にある。その典型が「ねだり」[begging]である。トゥルカナは、問題を自分で解決するのではなく、親戚や友人にもちこんで、解決してもらおうとする。トゥルカナは「自分のことは自分でしない」。食料がない、着物がほころびた、ヤギを買ってくれなど、調査地はねだりにやってくる人でにぎわっている。ねだりによって物や家畜を獲得できること、ねだりをなんとかしのぎ財産を守ることができて一人前のトゥルカナである。ねだりは調査する私にも容赦がなく、むしろ一日家にいる、金品をもっている、ということで格好の相手となる。それは調査自体をつらく感じさせるほど激しいものであり、ともすればさまたげとさえ感じられた。ここでは、トゥルカナのねだりの実態報告とそれへの私の対応を紹介する。当初は、このような「ねだりへの対応」とは別に調査があるかのようには思っていた。しかし、ねだりへの対応が調査におりこまれていたのに気がついた。アイデンティティの感覚は社会が用意した役割を遂行するなかで得ることができるという。ムズング（黒人以外の人）、金持ち、調査者、治療者、運転手、友だち、父親。このような役割をつうじて、私は、相手との関係を考えてようとする。しかし、結局、私は、「ねだられえ」[ねだられる人]なのだ。そう考えても、トゥルカナでの調査は楽にはならない。しかし、けれんみのないものになる。私もぞんぶんに主張してい

わけだ。ねだられのなかに“自由”がある、のだろうか。

2-2 中村香子：津田塾大学学芸学部卒。日本アイ・ビー・エムに6年間勤務。退社してケニアへ。ケニアではNGO(AMDA:アジア医師連絡協議会)に所属し診療所の再建プロジェクトに従事。帰国後、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科に入学、現在に至る。1999年よりケニア共和国北部に住む牧畜民サンプルを対象に調査を実施している。主として「モラン(戦士)」とよばれる10代後半から30代前半の未婚の青年たちとつきあいながら、彼らを軸にサンプル社会における年齢体系の変容過程を記述したいと考えている。調査は、ビーズを多用した派手な装身具を手がかりにおこなっており、現在の関心は、青年層の恋愛、モランの文化と観光産業とのかかわりなどである。

無心する側の論理

サンプルとよばれる人々は、人口約15万人、そのほとんどが牧畜を生業としている。家畜をこよなく愛する彼らだが、私が彼らにあげたおカネが私にとっては同様に大切なものだとして理解してくれるはずもなく、これまで幾度となく彼らの「無心」をめぐる態度には、困惑させられてきた。しかし、時として、無心する側の論理のようなものの発見があり、そうした発見をとおして無心される私の気分も変化した。乗り越えても乗り越えても「無心の壁」は無数にあるようだが、「壁を乗り越えた」という気にさせたいいくつかの発見の経験についてお話ししたいと思う。

2-3 鈴木裕之：文化人類学。修士課程ではザイルはキンシャサのポップス（リンガラ音楽）を、博士課程ではコート・ジヴォワールはアビジャンのストリート音楽（レゲエとラップ）を研究。現代アフリカ都市においてポピュラー音楽が生起するプロセスをテーマとする。現在はギニアにおいてマンデ系グリオがショウ・ビジネスに適応し、伝統を利用しながら新しい音楽を生みだしている様態を研究中。

自分は『誰に』、『なぜ』金をあげたのか？：アビジャン・ストリートのフィールドか

私は1989年から約10年間、コート・ジヴォワールのアビジャンでストリート文化の調査・研究を続けてきた。いま振り返ってみると、その過程で特定の人物に金銭的援助を続け、その他の人々には援助を完全に拒んできた事実思い出した。金銭的援助に関する明確な方針をもっていたわけではないが、無意識のうちになんらかの基準を設けて相手を区別していたわけである。その基準とは一体何であったのか、援助を続けた3組（レゲエ・シンガー1人、ラップ・シンガー1人、自動車見張り番のグループ1組）と私との関係を具体的に検証しながら、明らかにしたい。

2-4 澤田昌人：1990年、京都大学大学院理学研究科修了（理学博士）。人類学。1980年、ケニア、ウガンダを訪問。その後、故伊谷純一郎先生の研究室に入り1985年、ザイル共和国でピグミーの研究を始める。1987年から98年まで6度93年には現地で結婚した妻を伴って帰国。98年に、妻と2人の息子を伴って入国したがすぐ戦

争が始まり、現地の友人の助けで何とか国外に逃れることができた。

「無心に対処する身構え一個人的な感想、あるいは諦念」

アフリカに出かける日本人の研究者が現地で知り合う人の多くは、全く異なる文化的、社会的な背景を持っている。当然のことであり、そもそもそうでなければ人類学者はわざわざ出かけていかなければならない。人類学者にとって異文化、異なる社会との出会いは「目的」であり、いわば「飯の種」でもあって、ウンザリすることはままあっても拒絶すべき筋合いのことがらではない。他方しばしば忘れられがちなのは、現地の人びとと、科研費などのファンド（私費の場合もあろうが）を潤沢に用意した研究者との間の経済的格差は、天文学的なスケールにおよぶという事実である。経済的格差に伴うさまざまな葛藤、摩擦は、異文化摩擦と同様、避けることのできないものである。無心の問題もそのような葛藤の一つとして考えることができる。一方は歓迎すべきもので、他方は厄介なもの、と言うのではバランスを欠いたことになりはしないか。私は現地に姻族を持っており、多くの人とは少し違う立場にあるが、具体的な要請の形式、内容などを紹介しながら、フィールドワークする人生の特殊性、あるいは業のような側面に光をあてたいと思う。

1 無心されることの必然

(1) 文化的、社会的相違による経験は歓迎し、経済的格差に基づく経験は厄介なもの？

(2) 同じ村に住んでいるのに狩りも畑仕事もせず、ノートやカメラを持ってうろつく「物持ち」と、顔見知り以上の関係になるためには？

2 無心される人、されない人

(1) 現地の人でも、外国人でも、こわい人、ケチな人には、友達も少ないし、無心する人も少ない（ただし、無心する人＝友達、にはあらず）。

(2) 最初の訪問で私が比較的多く無心された理由（某氏に比べて）は、優しく対応した（気前がよかった）ため、つまり与し易かったため（アルトボ氏私信）。そのため、私の持ち物が急速に減っていく（あるいは予約済みになる）のを恐れ、無心競争が起きたのかもしれない（これは私の想像）。

(3) その後訪問の回を重ねるごとに、不思議にも無心の頻度が減って行った理由として、3つ考えられる。

- 1 私がだんだんケチになっていった。
- 2 私が現地で一見（いちげん）さんではなくなって、現地の人々が、私に見境なく無心することを恥ずかしく感じるようになったため。
- 3 私個人ではなく、私に雇われている人や、何年か後の訪問の際には私の妻に無心するようになったため。

周囲の人々の実感としては、3番の説明がもっとも説得力を持つようだ。

3 外国人が現地で（ほとんど）無心しない、というのはどう見えるか（現地の人々の目から）？

(1) 言葉ができずに無銭旅行をする若者

（某氏私信）・周囲の人とコミュニケーションはとらず、しかし彼らから援助を一方的に引き出して旅をしていく日本人。

(2) リヤカーにすべてを積み込んで、宿、食料の申し出を断り、アフリカを横断した日本人

英語は話せたが、彼が必要とした情報は道路の状況であり、ものを通した現地の人々との交わりではなかった。

(3) 人類学者を始め、現地での調査者の生活は、援助を一方的に引き出したり、全く受け入れなかったりする（1）や（2）とそれほど異なるのだろうか。物をもらったり、与えたり、そしてそれに伴う感情的な動きを経験したりという、その土地では当然であるはずの日常生活は「仕事の邪魔」であり、「私の生活と心を乱すもの」と捉えられているのではないか。

4 永遠に続く婚資の支払いと際限のない無心。

(1) 私だけではなく、婚資はずっと要求されることになっている。というより、婚資という名目であろうがなかろうが、姻族はつねに要求する権利を持っている。結婚とは、姻族からの永遠に続く婚資の要求と同義である。

(2) 実は、この際限のない婚資の要求が、姻族と私との関係性の継続を保証しているのである（一般的には離婚後もその関係が続くことになっている）。ならば無心も……。もう諦めようではないか。

2-5 慶田勝彦：1986年から東アフリ

カ・ケニア海岸部のミジケンダグループ(ギリアマ)のフィールドワークに従事する。妖術を中心とした言説と儀礼研究をその研究が下火になるころから始めたため消え行く運命にあるかと思っていたが、最近リバイバルしてもあるので「しぶといもんだ」と自分でも驚いている。アフリカ音楽にもはまってぬけられなくなっている。開発援助とオカルトとの根深い関係にも関心がある。映像を媒介としたアフリカ文化の生産と消費のプロセスも面白い。

「白人」だから無心されるというのは本当か？
—ギリアマでの〈無心物語〉あれこれ—

私の発表では、「白人(日本人含む)」だから無心されるという言説について考える。私の経験からして、この言説はまざれもなく事実であるように思える。けれども「白人」であるがゆえの無心はステレオタイプに基づいた〈白人像〉と同様に突飛でもあるため現実化することは稀で、単なる挨拶がわりのことも多い。一方で、より日常的な無心は「白人」であるという理由に還元できない広がりをもっているし、複雑である。この点に関するギリアマでの経験から、「私の身代わりに無心された純真な日本娘」、「ヤシ酒のたかり方—カモられたカンバ人」、「食い逃げの美談—無心と笑い」等の短い物語を提示しながら、「白人」だから無心されるという言説について議論してみたい。

2-6 岡崎 彰：社会人類学。1972年、早稲田大学学部在学中、ふと訪れたアフリカにはまり、人類学を勉強し直して後、フリー（無所属・無給）のフィールドワー

カーとして、またアフリカンポップスの評論家として、バイトと節約生活で金をためては、マーサイ人の間に居候し続ける。やがて民博やリトルワールドの資金援助を得られるようになって、1981年頃からスーダンのガムク人と付き合うようになり、内乱に翻弄されるガムク人の運命に一喜一憂しつつ、その生き延び作戦と夢の活用との関係について博論をまとめたら、オックスフォード大学からエヴァンズ・ブリチャード（記念）講師として招かれる。

3. フォーラムからの観点

5人の報告者の配付資料からだけでもそれぞれの状況と体験に共通性よりも多様性が浮かび上がってくる。紙面の都合上報告内容についての紹介は限らざるを得ず、参照にとどめる。

作道氏は飛び抜けて「つらさ」を訴えており、ねだりの状況をナレーションの形式で再現している。氏が人類学者でなかったことは、現地で起こりうる事について十分な心の準備ができていなかったという説明もあり得るけれど、「つらさ」の根本的な源泉はトゥルカナ民族の社会行動にある。この民族については京都大学の伊谷純一郎氏や太田至氏が研究しており、その「個人的援助要請」の凄さは私もよく聞かされていたし、私も2度訪問して実感している。彼らにとって「ねだり」は正当かつ必要不可欠な「文化行動」なのである。「トゥルカナ」は、問題を自分で解決するのではなく、親戚や友人にもちこんで、解決してもらお

うとする。トゥルカナは自分のことは自分でしない」(作道前掲)。これは言い過ぎではないかと感じる日本人は少なくないかもしれない。しかし、自分のことを自分でする人物が出たとしたら、トゥルカナでは反社会的行為と取られるであろう。

私が調査団の仲間5人で南トゥルカナに行ったときのエピソードを一つ紹介しよう。

宿泊用ロッジはトゥルカナ湖上の小島にあり、船が着くとポーターたちが待っていた。当然荷物を運んでくれるものと思ったが顔をしゃくって、「自分で運べ」と合図された。一人が後ろから付いてきて、部屋に付くと手を出し「チップ」と一言叫んだ。おいおい。私はマネジャーにいったい何事だと聞いた。彼はキクユ民族で、吐き捨てるように言った。「あいつらみんなトゥルカナだ。蛙を雇った方がましだ」。自分の事は自分でしないばかりか、しなかったことに対して報酬を要求できるのである。

太田至氏から聞いた話が理解の助けになるだろう。彼は二人のトゥルカナ青年をナイロビに連れて行き、結婚の交渉を撮影したビデオの書き起こしを頼んだ。二人はその仕事に没頭し、太田氏にこう言ったという。「これ、凄く役に立つ。帰ってから交渉が上手くなれる。」さよう、彼らの行動は「ねだり」でも「ベギング」でもなく、「交渉」と理解すると、それまで理不尽に思えたことが彼らの社会的文脈では当然だったと納得できる。トゥルカナにおける「ねだり」は社会制度であり、作道氏もこの理解には到達した。しかしその交渉の執拗度は

外部の者には「つらい」事には変わりはない。

私が1968年から2年間その間で暮らしたウガンダの(イ)テソ民族は、言語・文化的にトゥルカナと同系統で、行動様式も似ている。私もテソからの個人的援助要請を度々受けてつらい思いもした。しかし、作道報告を聞くと、私の当時の「つらさ」は作道氏の2割程度で、調査の面白さで十分お釣りが得られていたことを悟った。

中村香子氏の調査したマアサイ系サンブル民族は北西部でトゥルカナと接しており、しばしば牛略奪の被害を受けてきた。彼女の体験と解釈は次の引用で代表できるだろう。

「一緒にいたモラン(戦士階梯の青年)にこう言ったのです。『皆、私の顔を見るとお金、お金、お金って……。私、もう疲れた』。すると彼はしばらく考えてこういいました。

『キョーコ、僕たちはミルクに慣れすぎている。ミルクは今日なくなるまでしばらく、明日になればまた出る。僕たちにとってお金はミルクみたいなものさ。皆君のところに来て、今日は出るかどうかためしに絞っているだけだよ。牛も出るときしか出さないんだから、君も出るときだけ出せばいい』。これを聞いた私は急に目の前が明るくなりました。彼のあざやかな比喻は、私が苦しいのは間違った認識をしていたためだ、ということを教えてくれたのです。」(中村報告)

私が使った比喻はもう少しはしたなくて、「ひねると金が出る蛇口」扱いされているようだと書いたことがある。私はサン

ブルを通ったときに、歩いていた2人のモランに道を尋ねた。親切に教えてくれ、何も要求しなかった。優しい人たちだと思った。援助要請の迫力についての中村氏の見解は；

中村「私のレーティングだと、トゥルカナを100とするとサンプルは3ぐらいです。」そんなに違うのかなあ。

サンプルの南方、バリngo湖の近くに同じマアサイ系のチャムス民族が住んでいる。

トゥルカナからの帰途、通りかかった私たちは牛の大群が次々と帰ってくる光景に見とれていた。一人の老人がやってきて、付いてこいという。案内されたのは小屋の外で羊肉の網焼きをしているところだった。私は「どこが一番おいしいの」ときいた。ここだよと言って見せてくれたのは、尻尾の付け根に垂れ下がっている脂身だった。確かにとろけるうまさだった。代金を払おうとしたら、「客人からはもらえない」と断られた。一同トゥルカナとの違いを感じた。チャムスには後に河合香吏さん（現東京外語大）が調査に入った。

フィールドワークでは女性の方が男性よりずっと得だという私の発言を受けて河合さんは語った。

河合「それはさきほどの中村さんの話が見事にしめしてることだと思います。私も若い頃にはそれほど無心されなくてむしろ餞別風の物を貰ったこともあります。そのときにトゥルカナに入ってらした京大の先生たちから、現地の連中からものをもらうことはなにごとだとよくしかられたことが

あるんです。その後、二度三度と通うようになると、無心と似たような事がおきました。」（フォーラム発言）

ここでもトゥルカナが引き合いに出されている。マアサイ系諸民族とトゥルカナ・テソ系諸民族は、言語的に遠縁関係にある。また、近代史において西欧文化や国家行政の影響をかなり遅くまで排除しようとしてきた、行政側から見れば「厄介な」牧畜民である。しかし、文化行動、とりわけ援助要請交渉の仕方には二つの民族群の間になりの違いがあるようだ。私が作道論文に共感したのは、トゥルカナとテソの文化的類似から来る共通体験に基づいているともいえよう。今回のフォーラムで分かったことは、トゥルカナ民族がおそらく黒アフリカでもっとも社会内援助要請の激しい社会を形成していることである。

ウガンダのテソ民族、特に私の知っている地域の住民は1986年以来内戦（反乱）と近隣牧畜民の略奪攻勢で多くの域内難民を出し、困窮を極めている（長島、ウガンダ・イテソ民族の悲劇）、『アリーナ』2、中部大学国際人間学研究所2004。それはまた、青年層の間で熱烈なキリスト教徒が急増していることと関連している（長島、2005年調査）。彼らの行動様式はそのためかかなり変化しており、あからさまな要請は減っている。しかし、私の長年の友人オジロットの30歳になる息子オジロット・ジュニアは、私の援助が欲しいときにはまず神に祈るのだそう。彼に依ると、「negotiation power」は神に与えられる。」外見は変わっても文化は継続する

一例である。その父オジロットは妹の娘の産んだ子をナガシマ・ノブヒロと名付けた。これで援助チャンネルは固定化され、その赤ん坊が母親を通じて最初に私にねだったのは蚊帳とマットレスだった。

コンゴから東、南にかけて最も多いのはバントゥー語系諸民族であり、一般的に言えば彼らの人当たりはトゥルカナにくらべてソフトである。澤田氏と慶田氏の調査地はこの言語群にある。澤田氏と鈴木氏はアフリカ人と結婚しているという共通性を持つ。鈴木氏のフィールドは大都会のストリートということで、「無心」は断るが必要な援助は積極的にするという逆の立場から報告された。その内容は実にタフな日本人がいると驚嘆したものです。

姻族との関係について、澤田氏は諦念に到達した心の過程をととてもわかりやすく語ってくれた。「人類学者は、上手に調査をしたいという下心もありますし、博愛主義者にならずにちゃという偽善的な面もあって、皆とお友達になろうとしますので、皆にお金や物をあげてしまいます。そういうことによってどういう目にあうかは、さきほど中村さんありましたけども、つまりくみしやすいということで集中的に無心されることになるわけです。これは私の配偶者が、私たち人類学者への村人の無心を観察して感じたことだそうです。」

「さすがにしんどかったのは、嫁さんを日本に連れて帰ろうとしたときに、婚資等の問題にだいたいかたがついて、やれやれこれで主だった人との話しはついたかなと思ったら、嫁さんの親戚と自称する人たち

が毎日朝から晩まで次々とやってきて私の小屋の前で座り込んで何かを待っている、ということでした。私の嫁さん自身もこの人たちには見覚えがないのですよ。それほど遠い、遠い「親戚」なのです。そのたびごとに挨拶に出かけてなんやかんやと長い話を聞いて、それからちょっとしたお金を渡して「おじいさん、どこかでのをうるおして下さいね。」と帰っていただくということの繰り返し。私の友人でもあり姻族でもある人が、首をふりふり『澤田のように、ああいうお客さんに毎日朝から晩まで無心されていたら僕は気が狂ってしまう。』というふうに言っていました。」

私の場合、最初にテソに入ったときは無職で、イギリスから乏しい所持金で直行したのだから、金を上げようなんて事は思いつかなかった。それでも同居した2人の小学生の学費は工面した。当時ウガンダの経済は順調で、1シリングが50円だった。現在は100分の6円で貨幣価値の下落度は80分の1を超えている。それでも単車に乗り、カメラを持っていたし、「外人」[emusugun: 下記の muzungu と同語源]なのだから金持ちと決められていた。

慶田氏は、住民側から人類学者や「白人」[たぶん muzungu という語の訳、私は以下「外人」と訳す]がどう見えるかについて興味深い報告をされた。現代の開発用語を巧みに使いながら、外人から援助を引き出す戦術が編み出され、外人を「カモ」にする人が増えているというのである。これは明らかにトゥルカナとは異なる、自分たちと外人とを区別した上での、より新しく、

都会的な無心の社会行動が発達している。

4. 暫定的整理

この研究ノートでは提起した問題とフォーラムでの発言を理論的に展開する段階には進めていない。そこで、岡崎氏のコメントを参照しながら様々な問題の「暫定的」整理をしておきたい。

4・1 フィールドワーク、人類学者の業か犯罪か

フィールドワークは他者の社会に入ることによって始まる。現在では調査許可を得ることで合法化される。その根拠は、知的探求の自由という考え方にある。そして、この探求への欲望は人類の本質の一部であり、その実践はいかなる形であれ人類史を貫いている。澤田流にそれを「業」と呼んでも良い。しかし他方、ポストモダン人類学でしばしば論じられるように、それを強者の侵入と捉えれば、犯罪性を帯びることになる。植民地時代のフィールドワークはこの論調で非難されることがあるし、現代でも似たようなことは起こりうる。それなのに、住民からの「無心」について語るのは身勝手すぎないかという批判に対しては、最初に述べたように、それを経験の現象学として扱うことの意味をフォーラムで問いかけたのだと言っておこう。私自身は、矛盾に満ちてはいるものの、フィールドワークを肯定的に考えている。

4・2 絶対的経済格差、グローバルな強者と弱者、北と南

日本人人類学者とアフリカの農民、牧畜

民との間には絶対的な経済格差があるという認識は共有されている。岡崎氏や私のように、相対的に貧しかった者でも背後には日本が控えていて、いざとなれば借金する可能性もあったのである。世界システムにおける南北格差はフィールドワークにも厳然として立ち現れる。対等的関係はあり得ないという澤田氏のご指摘は正しい。問題は、そこから先にある。個人要請には無限に対応するというという澤田氏の「悟り」もあれば、相手を厳選して援助するという鈴木氏のやり方もある。現実的には、いかに構造的格差があっても、日本人の一個人が全ての、増大していく要請に応えられる経済力はない。金持ちは希にしかフィールドワーク等しないだろう。私が悩んだのはこの点で、結局鈴木氏に近い、限られた人への援助という方策をとらざるを得なくなった。

4・3 心とお金

日本社会における心とお金の関係は両義的である。金の話は友情を壊すという考え方がある。これは心とお金は相反するという認識になる。他方「誠意が足りない」という批判はしばしば「金額不足」を意味している。しかし前者の方が圧倒的な日本文化で、友達なのだから「金の話はよそう」とアフリカ人に言った日本人を私は何人も知っている。テソ人は、金をくれる人は「いい人」（馬鹿の意も含む）である。これはアフリカ一般にいえるだろう。

「無心」ということばをタイトルにしたために、「心」とは何かという議論も出た。作道氏は、「トゥルカナには心がない」と

断言した。この場合、日本的な「思いやり
の心」という意味に解釈している。この「思
いやり」という語も私にはしばしばいが
わしく聞こえる。テソ人とは「心 etau :
心臓」とは何かという議論をした。「見え
ないもの」というのが普通の答えだ。用法
からは「心とは自己中心で邪悪な物」とい
う意味も引き出せる。あの人の「心は良い」
という言い方もある。

岡崎氏は心の問題はそれぞれの社会の
「人間観」として扱えると述べた。そのと
おりだと思う。付け加えれば、私の知って
いるアフリカ社会の基本的人間観は「性悪
説」を基本にしている。「性善説」好きの
日本人とは最初からすれ違うわけだ。心が
あるから「無心」ができるのです。

4・4 関係の継続性、あるいは永続する 関係性

報告者ばかりでなく、討論参加者も含め
てほぼ全員がいろいろな角度からアフリカ
人の無心の背後にある関係継続への強い欲
求が論じられた。彼らは一度で終わる関係
は考えられないという前提で行動している
ように思われる。私は調査助手とは調査終
了までの契約関係と思いこみ、かなりの厚
遇をしたつもりだったが、関係の強化継続
を迫られたのは調査終了後だった。これは
たぶん全員の共通経験だと思う。あるテ
ソ老人が私に言ったことがある：「イギリ
ス人が持ち込んだ最悪のことばは ‘Thank
you’ だ。」どうして、と説明を求めた。「そ
れを言ったら関係は終わってしまうではな
いか」と彼は言った。そうかどうかはわか
らないが、この考え方が普通であることは

確かめた。「感謝され好きの」日本人には
有益な情報であろう。永遠に続く望ましい
関係こそ彼らの理想なのかもしれない。

4・5 結語

個人的援助要請は基本的に道德の問題で
あるという認識から出発し、ここまで来た。
分かったことといえば、個人的援助要請は
彼らの道德の問題であり、我々の道德の問
題であり、彼らと我々の関係性の道德であ
り、世界システムの含む道德であり、それ
は絶えず相対的に流動しているという、曖
昧かつ混沌とした認識の確認であった。こ
れでは「分かった」とは言えないことの確
認でもある。いずれ再挑戦したい。